



JA新潟かがやき しろね地区

しろね地区は、JA新潟かがやきの中で生産額の約3割を占める一番大きな産地。
主な品目は、果樹、枝豆、きゅうり、トマト。

枝豆の取組

水稻が盛んな地域で、産出額1億円を目指し、土地利用型で儲けられるものとして枝豆を選定。

面積拡大（H30年度40 ha）、機械化体系の確立、契約販売の拡大、新規生産者の掘り起こしに取り組む。



えだまめ部会について

平成10年にえだまめ部会が発足

部会員：56名（R5.3月時点）

出荷面積：約54.9ha（R5年）

出荷量：約151.4t



生産サイドの目指す姿

「機械化体系を確立、産地規模を拡大、所得向上」

- ・ 7品種をリレー栽培することで、出荷期間を長くできる。また、播種から出荷までの作業を分散できる。
- ・ JAが収穫機械を整備し、農業者・法人に貸付ることで面積拡大。
- ・ 共同選果機導入（R元年）によって共選共販体制を構築。

課題は、品質の底上げ

- ・ 当選果場は、品種別・荷受形態別のプール精算であるため、生産者ごとの品質差が大きな問題になる。品質の底上げと生産者ごとの品質差を無くすることが急務である。

販売サイドの目指す姿

「契約販売を拡大し、販売額の安定、向上を図る」

- ・ 県外出荷（首都圏など）が5割（R5年度）。
- ・ 需要に合わせた作型の調整を毎年実施している。
- ・ 出荷者大会、出荷反省会においては、テーマを設けて市場関係者と「市場懇談会」を開催することで、市場の販売方針を担当者より聞いて生産販売に生かしている。
- ・ 価格動向より、出荷ピークを単価の高い時期に持っていくように調整。

課題は、B品の商品化

- ・ 選果機での選果下を商品につなげていく体制ができるといい。B品は、ペーストにしてお菓子用、冷凍むき豆を給食用にしている。